

特別活動部会（中学校）

県研究主題

望ましい集団活動を通して、生徒一人ひとりの自主的、実践的な態度の育成と豊かな人間関係をはぐくむ指導の充実と、評価の工夫・改善

提案 1

提案者 福元 隆之（川崎地区）

<研究主題>

生徒会活動や学級活動の話合い活動を充実させるための工夫・改善

1 提案内容

本研究提案校は、昭和 55 年に地域待望の中学校として開校した。また、学校規模も大きく、生徒総数は川崎市内でも大きな学校の一つとして挙げられる。現在、生徒の自主的・実践的な態度を育てるため、校内における話合い活動をより、活性化させるための工夫に取り組んでいる。ここでは、提案校の主な取組について紹介していきたい。

（1）リーダー研修会について

様々な行事でリーダーが主体的に活動している。そのリーダーを育成するための行事がこの研修会である。提案校ではリーダーをサミットメンバーと称し、このメンバーは生徒会本部、各専門委員会委員長、部長長などから構成される。研修会は、学校近くの公共施設「川崎市宮崎青少年の家」において、宿泊込みで行われ、プレゼンテーションのやり方や話合いの進め方等を、教職員も参加し、取り組まれている。

また、この場での教員と生徒との関わりは非常に強く、話合い活動のロールプレイでは、教員側が様々な場面を想定して行わせるため、より実践的な力を身に付けさせることが期待される。

（2）「話合い活動の進め方」のワークシート

各学級で話合いを円滑に進めるため、様々な場面や状況に応じた話合いのまとめ方ワークシートを作成している。このワークシートは発言者の声の大きさや言葉遣い、聞き手としての態度、賛成の立場・反対の立場の意見の述べ方も記されており、シートを活用し、学級の話合いのみならず、各委員会では委員長が活用し、生徒議会での話合いを進める場においても利用されている。

（3）生徒議会報告書

各委員会が行った活動内容や反省、各学級への呼びかけが一目でわかる報告書を作成している。そのため、全校生徒が他の委員会活動への興味、関心を深めることができるようになっている。

（4）提案校での成果

他の委員会活動に興味・関心をもって話合いに取り組み、積極的に質問をする生徒が

増えてきた。各専門委員会の委員長が話し合いを通して、問題を真剣に考え、具体的な改善策を見つけようとしている姿勢が見られた。話し合いの様子においても、ただ意見を述べ合うだけでなく、批判的な意見が偏ることなく話し合いが円滑に進めるよう、協力できるようになってきた。

2 協議内容

(1) リーダーの捉え

→サミットメンバーにリーダーに必要なものを考えさせ、それをもとにリーダーを育てる活動を行っている。

(2) 話し合い活動

→学級レベルと生徒会レベルでの進め方は、基本的には同じである。各委員会単位での把握は難しいが、リーダー研修の骨組み通り行われている。

→他教科での話し合い活動では、もともと社会科の研究推進校であり、教科で話し合い活動に取り組んでいたため、特活でも相互作用で行うようになってきた。

(3) 行事の最中の話し合い

→行事ごとに必ずテーマを決めており、それをもとに話し合い活動を進めている。

(4) 提案校以外での話し合い活動の工夫

→話せない生徒のために、話したかった内容を書かせるようにしている。また、担任および担当者はコミュニケーションの一環として必ずサインをするようにしている。

→個人の意見を言わせ、班で話し合いをさせ、クラスレベルにもっていく。

→グループの人数を5～6人でやっていたが、4人に減らすことでより円滑になった。

3 まとめ

(1) 提案校の成果より

全国学力・学習状況調査のアンケートから、自己有用感・自己肯定感が非常に高く、活力のある学校という印象を受けた。この結果からも話し合い活動は功を成していることがわかる。

また、学校目標もしっかり定まっているため、それに伴い土壌も盤石であり、全体計画も見通しのあるものとなっている。話し合い活動の充実は、生徒の育成のためにとっても必要なものであり、提案校は時数を取るのが難しい中でよく取り組んでいる。その成果が生徒たちの活動におおいに活かされていることもよくわかる。

(2) 話し合い活動の充実について

話し合い活動の充実は、意識とシステムのバランスが重要となってくる。提案校では話し合いがどのように活用されているか、学校目標に沿ったものとなっている。そのため、PDCAのサイクルがしっかりなされており、指導側が提供しているシステムと生徒達の意識、例えば「委員会としてどうありたいのか?」「行事はどう終えたいのか?」がかみ合っている。さらに、教員の共通理解も必要となってくる。これらが三位一体となることで、提案校が行っている話し合い活動はより充実したものとなっていく。

<p><研究主題></p> <p>生徒が取り組むいじめ防止啓発活動の研究</p> <p>— スクール・バディの活動を通して —</p>

1 提案内容

本研究会の主題に基づき、湘南DVサポートセンター主催の「いじめ防止プログラム」を受けた生徒のスクール・バディのいじめ防止に取り組む活動について発表された。

(1) テーマに迫るための手立て

平成 26 年度より毎年 1 年生を対象に湘南DVサポートセンター主催の「いじめ防止プログラム」を実践している。

- ① 全体講演会
- ② 各クラスでワークショップを 4 回
- ③ 有志を募り、スクール・バディ・トレーニングの研修
- ④ スクール・バディを生徒会組織に位置付け
- ⑤ 生徒による検証改善サイクル (P D C A) 話し合い活動
- ⑥ 教員の検証改善サイクル (P D C A) 中長期的な指導・助言

(2) 研究実践

湘南DVサポートセンターによるいじめ防止プログラムは、1 年生全員に 5 時間で進めている。スクール・バディ・トレーニングは放課後や夏季休業中に実施した。

- ① スクール・バディ (生徒会活動支援部の組織として位置付け、教員配置と環境整備)
 - ア 教員配置… 1 年目は 1 学年教員と生徒会担当、2 年目は生徒活動支援部の 1、2 年の学年教員、3 年目は生徒活動支援部の各学年教員
 - イ 環境整備…バディ・ルームの設置、ポスターでバディ・ルームをアピール
- ② 実際の活動
 - 平成 27 年度…前年度にトレーニングを受けた 2 年生が活動の中心
 - 平成 28 年度…スクール・バディを特別委員会に位置付け
 - ア (P) 年間計画… 2 学期から 1 年生が業務に参加
 - イ (D) 相談業務…毎月第 2・4 木曜日 16:30 までバディ・ルーム開設
 - 広告活動…CMを作成し全校集会で上映
 - レクリエーション (バディ・レク) などの仲間作り
 - スクール・バディサミットへの参加
 - ウ (C) 評価・点検…湘南ジャーナルからの取材で位置付けや効果の再確認、生徒年間反省によりバディ・ルームの改善と V T R 作成の早期始動の見直し、教員反省では活動内容の周知や学校全体での組織活動不十分が挙げられた。
 - エ (A) 改善…生徒会年間反では各学年より改善策を提案、教員反省では学校全体で共有化し教員配置を検討

(3) 研究の成果

- ① 生徒による検証改善サイクル (P D C A) として
 - 特にスクール・バディ・トレーニングを受けた生徒に「自分はスクール・バディだ」と

いう意識が確実に芽生える。また、生徒全員がバディ・レクに親しみをもって、楽しみにしている様子うかがえるようになった。

② 教員の各活動や行事の検証改善サイクル（PDCA）として

- ・目標の有効性…学校目標に迫る態度の育成が行えた。
- ・活動実施状況…常に望ましい集団の育成に則っているか検証し進められた。
- ・各活動及び学校行事の相互の関連の在り方…「自立した個」の育成に貢献し、「望ましい集団」の育成につながる可能性がある。
- ・生徒の変容と集団の変容…アンケート結果により、いじめに対する意識が格段に向上した。有志に希望しなかった大勢の生徒たちもリーダー・フォロワー体験を通して、自分が所属する集団の秩序とまとまりを作ることに意識的になっている。

2 協議内容

(1) 提案に関する内容について

- ・スクールカウンセラーの立場は…何かあった場合には、スクールカウンセラーに相談をしている。
- ・相談業務について、教員の立ち位置としては、見ているだけであるか…スクール・バディの存在は、抑止力を目的としており、教員はサポートしている。担任や学年教員という立場での相談は行っている。
- ・特別活動で行うか、総合で行う内容か…生徒会活動に組み入れているため特別活動で行っている。

(2) いじめ防止で取り組んでいることについて

- ・学校全体であいさつ活動やレクレーションを行っている。
- ・秦野市では、相談カード（電話番号の記載）を用いて相談し易い環境を整えている。
- ・8月下旬に開催する横浜会議では、「いじめ」という言葉を表に出さず、「学校をよくする」という視点で話し始めるようにしている。ビデオを撮っている学校もある。

3 まとめ

(1) 県事業との関連

- ・今回の内容は、湘南DVサポートセンターと県・地域との連携で、いじめ防止対策を推進することができた。

(2) 特別活動に求められるいじめ防止の取組について

- ・平成25年度から児童・生徒の自主的・実践的な態度の育成が求められており、教員がいじめを許さないことはもちろん、学習指導要領の生徒会活動の目標にある「望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとすることや身近な問題の解決を図るための活動、生徒による自主的、実践的な活動が助長されるように指導すること」が大切である。

(3) 今後の国の動向をふまえた実践

- ・今回の提案内容は、育成すべき資質・能力の3つの柱（案）を網羅した取組となっている。様々な課題はあるが、今後も引き続き取り組めるとよい。